

1 主課題名 (主任研究者)	妊産婦死亡の防止に関する研究 (武田佳彦)
2 分担課題名 (分担研究者)	胎盤形成障害と超音波診断に関する研究 (村田雄二)
3 研究期間	平成9年度～

#### 4. リサーチクエスチョン

- 1) 超音波断層法による胎児スクリーニング検査は周産期死亡率および罹病率の低下に役だっているか。
- 2) ドプラーエコーの有効性

#### 5. 今年度の研究成果

- 1) 超音波断層法による胎児スクリーニング検査は周産期死亡率および罹病率の低下に役だっているか。

妊娠中の超音波断層法によるスクリーニング項目のうち、妊産婦死亡の主要原因である母体出血をきたす前置胎盤に注目し、そのスクリーニング法、分娩時出血の予測、母体搬送のタイミングについて検討した。

##### a. 経腹超音波断層法による前置胎盤のスクリーニング

- ・ warning bleeding は妊娠 19 週から出現するものがある。妊娠 28 週以前では擬陽性が存在するが、妊娠 32 週以降では診断が変更されたものはなかった。以上よりスクリーニングは妊娠 20 週頃より開始し、確定診断は 32 週以降に行うのが良い。
- ・ 低置胎盤と診断されたものでもその後前置胎盤と診断されたものがあり、また経膈分娩が可能であっても分娩時の出血量が 1000ml を越えるものの比率が常位胎盤より多く、低置胎盤の診断意義が確認された。

##### b. 分娩時出血量の予測

- ・ 胎盤が前壁か後壁かにより帝王切開時の出血量に差はなかった。
- ・ 帝王切開の既往がある前置胎盤では帝王切開時の出血量が多かった。
- ・ 全前置胎盤は辺縁前置胎盤に比較し帝王切開時の出血量が多かった。

##### c. 母体搬送のタイミング

- ・ 前置胎盤を対象に、帝王切開以前の少量の出血 (WB=warning bleeding) の有無について検討した結果、
  - イ. WB の有無は帝王切開時の出血量と相関がなかった。
  - ロ. WB のあるものは分娩週数は有意に早く、早産になる率も高いので、その時点で母体搬送するのが望ましい。
- ・ 全前置胎盤、帝王切開の既往がある前置胎盤は大量出血に対処できる施設に母体搬送すべきである。

## 2) ドプラーエコーの有効性

帝王切開時の出血の予測に超音波カラードプラ法およびMRIが有用か否かを検討した。

### a. 超音波カラードプラ法

- ・自験例が少なくカラードプラによる出血量予測に対するスクリーニングの有効性は検討できなかったが、帝王切開時に出血量の多かった症例で内子宮口付近に lacuna flow を認めた。

### b. MRI

- ・自験例は3例と少なく有効性を検討するまでには至らなかった。
- ・文献による検討では、帝王切開既往例での侵入胎盤の診断に有用であるとの症例報告が2件あったが、それ以外の例での有効性を検討した報告はなかった。

## 6. 今後の研究方針

- ・経膈超音波による前置胎盤のスクリーニングについてその適正時期、予後について検討する。
- ・スクリーニングの有無による母体および新生児罹病について検討する。
- ・母体搬送時 warning bleeding の有無による母体および新生児の罹病について検討する。
- ・症例数を追加し、超音波カラードプラおよびMRIによる帝王切開時の出血量の予測、癒着胎盤の予測、および子宮全摘の予測について検討する。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



### 5. 今年度の研究成果

1) 超音波断層法による胎児スクリーニング検査は周産期死亡率および罹病率の低下に役だっているか。

妊娠中の超音波断層法によるスクリーニング項目のうち、妊産婦死亡の主要原因である母体出血をきたす前置胎盤に注目し、そのスクリーニング法、分娩時出血の予測、母体搬送のタイミングについて検討した。

#### a. 経腹超音波断層法による前置胎盤のスクリーニング

- ・ warning bleedig は妊娠 19 週から出現するものがある。妊娠 28 週以前では擬陽性が存在するが、妊娠 32 週以降では診断が変更されたものはなかった。以上よりスクリーニングは妊娠 20 週頃より開始し、確定診断は 32 週以降に行うのが良い。

- ・ 低置胎盤と診断されたものでもその後前置胎盤と診断されたものがあり、また経腔分娩が可能であっても分娩時の出血量が 1000ml を越えるものの比率が常位胎盤より多く、低置胎盤の診断意義が確認された。

#### b. 分娩時出血量の予測

- ・ 胎盤が前壁か後壁かにより帝王切開時の出血量に差はなかった。
- ・ 帝王切開の既往がある前置胎盤では帝王切開時の出血量が多かった。
- ・ 全前置胎盤は辺縁前置胎盤に比較し帝王切開時の出血量が多かった。

#### c. 母体搬送のタイミング

- ・ 前置胎盤を対象に、帝王切開以前の少量の出血(WB=warning bleeding)の有無について検討した結果、

イ.WB の有無は帝王切開時の出血量と相関がなかった。

ロ.WB のあるものは分娩週数は有意に早く、早産になる率も高いので、その時点で母体搬送するのが望ましい。

- ・ 全前置胎盤、帝王切開の既往がある前置胎盤は大量出血に対処できる施設に母体搬送すべきである。

### 2) ドプラーエコーの有効性

帝王切開時の出血の予測に超音波カラー Doppler 法および MRI が有用か否かを検討した。

#### a. 超音波カラー Doppler 法

- ・ 自験例が少なくカラー Doppler による出血量予測に対するスクリーニングの有効性は検討できなかったが、帝王切開時に出血量の多かった症例で内子宮口付近に lacuna flow を認めた。

#### b. MRI

- ・ 自験例は 3 例と少なく有効性を検討するまでには至らなかった。

・文献による検討では、帝王切開既往例での侵入胎盤の診断に有用であるとの症例報告が2件あったが、それ以外の例での有効性を検討した報告はなかった。